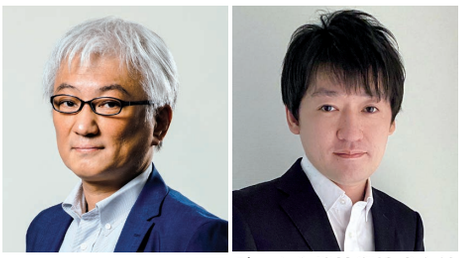
4 Mainstream 領域：ADM（Application Development & Management）

受注から提供までワンストップで遂行する体制作りと、より価値を生み出すAgileの実現に注力

NTT データ先端技術株式会社（以下、NTT データ先端技術）は Agile 開発やクラウドネイティブな開発について高いスキルを有する人材をプールするなど、開発体制を強化してきた。本稿では Agile 開発のコモディティ化が進むなどビジネス環境が変化するなかで高収益を実現していくための取り組みについて紹介する。



NTT データ先端技術株式会社
ソフトウェアソリューション事業本部
AP テクノロジー事業部
（左）事業部長
コーポレート・エグゼクティブ（デジタルビジネス推進）
平岡 正寿氏
（右）アジャイル・インキュベーション担当部長
梶原 直人氏

より多くの Agile 案件をワンストップで受注し遂行する体制づくり

NTT データ先端技術の Agile 開発案件は、大部分を NTT データ経由で受注したものが占める。また全体の開発を担うのではなく一部のパーツを提供することが多い。そのためワンストップで案件を任せられる対象としての認知度が低い、という課題があった。周辺環境の変化もあり、現在はワンストップでの案件受注増と、それに対応できる体制作りを進めている。

「NTT データグループが海外事業拡大や高付加価値サービス創出に注力していることもあり、NTT データ経由であってもワンストップに近い形で案件を任されるケースが増えています。直接受注する案件も含め多くの案件を受注していくためにも、NTT データ先端技術のみで案件を遂行する体制を強化する必要があると考えました。そのため認知度を上げ、案件需要を作り出し、開発力をより高める取り組みを続けています」（平岡氏）。

Agile のコモディティ化が進行しても付加価値により競争力を維持

同社が重視するもう 1 つの要素が「Agile のコモディティ化」だ。かつては Agile 開発を支援できることそのものに大きな価値があった。しかし Agile 開発の経験を有する企業が増えており、以前ほどの価値ではなくなりつつある。今後も競争力を保つためには、より価値を生み出す Agile にしていく必要があると考えた。

図 1 はこの考えに基づく事業戦略の概要を示したものだ。実際には

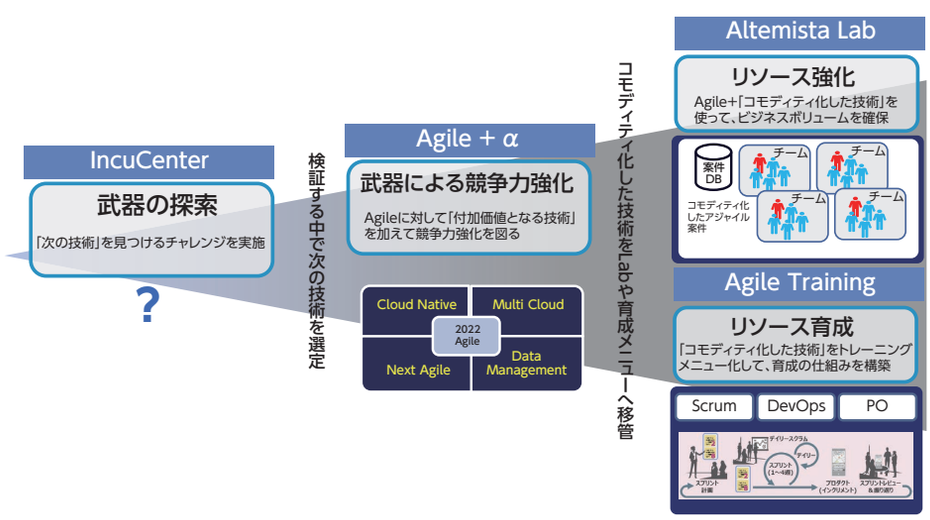


図 1　Agile を土台に 4 つの取り組みで強みを構築

さまざまな取り組みが行われているが、それらを大きく４つに分類している。図の右側が最もコモディティ化が進んでいる領域であり、左に進むにつれて新たな付加価値を追加する取り組みとなっている。

リソース強化／リソース育成

Agile のコモディティ化が進行したとはいえ、複数の開発チームを必要とする大規模な開発体制を整えるのは容易ではない。そこで高いスキルを有する人材をプールし、必要に応じて迅速に開発チームを組めるようにする施策を進めてきた。併せて高スキル人材を育成するための仕組み作りも行っている。

リソース強化は最も進んでいる取り組みであり、高度な要求に応えることが可能な体制が整っている。

Agile＋α：武器による競争力強化

Agile に新たな価値を追加し競争力強化につなげようとしている。技術的にはクラウドネイティブ、マルチクラウドのような比較的マチュアな技術を活用し新たな価値を生み出すことを考えている。

具体化している取り組みの例には、Agile を本当の意味で活用するため開発以前の段階で課題をどのようにビジネスにつなげるべきか検討する「デザインアプローチ」、また「Agile に取り組んでいるが、うまく出来ている実感がない」、「やってみたがうまくいかない」といった悩みを持つお客様に対し問題・課題の抽出と解決を支援する「アセスメントサービス」などがある。

また Agile 自体を高度化し次世代の Agile（Next Agile）と言えるようなものにする取り組みもある。大規模な Agile 開発への対応もその１つだ。最も具体化が進んでいる付加価値の１つが「ハイパフォーマンスアジャイル」（図２）だ。

「Scrum 手法において反復開発の単位であるスプリントは、一般的に１回につき１～数週間をかけます。しかし日、時間単位でスプリントを繰り返した方が良いケースもあります。このような高速な反復開発に対応できるほどパフォーマンスを高めた開発チームを提供できる体制が整っています」（梶原氏）。

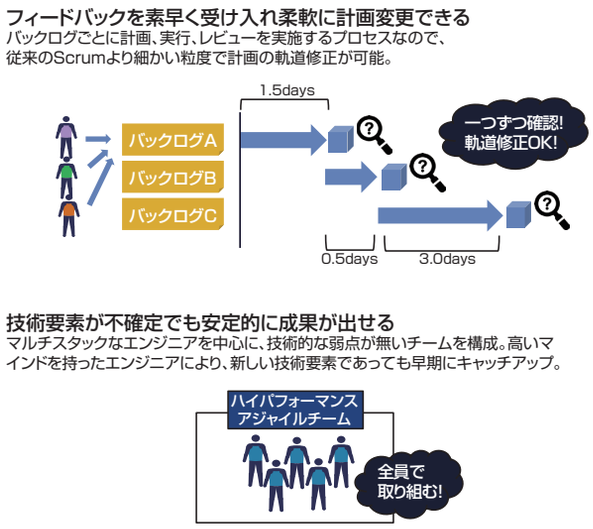


図２　ハイパフォーマンスアジャイルチーム

IncuCenter：武器の探索

将来 Agile+ αのαになり得るかもしれないまだ見ぬ武器を探すため、最新技術の評価とビジネス創出に取り組む仕組みを作り IncuCenter と名付けた。たとえば ChatGPT に代表される生成 AI を活用してソースコードレビューを自動化し、結果をソースコードに反映するといったことに挑戦している。

IncuCenter の活動を既存・新規のお客様にアピールするため、対外的な情報発信も行っている。

常に一歩先を見据え「より価値を生み出す Agile」を実現していく

「我々アジャイル・インキュベーション担当にはフットワークの軽いメンバーが揃っています。新たな価値創出の源泉となるこれらの開発は、その強みを活かせるよう、普段から失敗を恐れず圧倒的なリリーススピードと継続的改善に取り組むことを心がけています」と梶原氏が述べているように、これらの取り組みはスピード感を持って進められている。

Agile のコモディティ化に対応する取り組みの中で「コモディティ化した技術」や「＋α」、「次の技術」のように表現しているものはあくまでも「その時点において」という条件が付くとして、平岡氏は次のように述べている。

「今は新しい技術もいつかはマチュアなものになり、数年後には新たにコモディティ化している領域があるでしょうし、武器となる新たな技術が登場しているかもしれません。『Scrum 開発を得意とする人材リソースが豊富』という現在のコアコンピタンスも、そのうちコモディティ化するでしょう。よりお客様にとっての価値を生み出せる Agile を実現し続けるため、我々は一歩先を常に探し続けます。Agile でお困りのことがあれば、是非我々に相談してほしいと思います。」